

氏 名	徐 夢妍
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	甲 第 31 号
学 位 授 与 日	令和 3 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	「虚実対比」を生かした商業展示会のブースデザイン —格子を視点として—
審 査 委 員	主査 女子美術大学大学院教授 横 山 勝 樹
	副査 女子美術大学大学院教授 川 口 吾 妻
	副査 女子美術大学大学院教授 稲 木 吉 一

内 容 の 要 旨

第一章 研究背景と目的

本論文は六章で編成されており、序論である第一章では論文の背景と目的、そして構成を紹介した。「商業展示会」とはビジネス目的で商品の展示や売買(商談と小売の両者を含む)を行う集会のことである。商業展示会は実体でなければ実現できない「体験」と「対面商談」の特徴を有しているが故に、中国では電子商取引額が急速上昇する現状でも展示会の回数と総面積は影響を受けずに上昇している。そしてコロナ禍を受けてもなお、中国では2020年4月から商業展示会が徐々に再開された。従って、商業展示会はニューノーマル社会においても持続するイベントと想定される。筆者は中国で展示会ブースデザイナーとして実習をした際に、インパクト優先のブースが連なる展示会現場を煩わしく感じた。「分かりやすさ」よりも「見栄えのよさ」という主流の考え方は、かえって人を惹きつける魅力に欠けると考えられる。そしてその原因は、一目で見える情報量の過多と考える。本論では、情報を削除するのではなく、「省略」表現として考える日本の「余白の美」に着目して、その源流である中国伝統絵画にある「実体」と「余白」両方を重視する「虚実対比」の概念についての検討を試みた。そして山水画における「虚実対比」を伝統的絵画理論と中国伝統哲学から探ることで、展示会のブースに適用する手段としての格子型仕切りに関する考察を行った。

第二章 「気」の概念から生まれる「虚実対比」

第二章では「余白」と「虚実対比」の概念が生まれる要因について、日中絵画における「気韻生動」の法則が中国古典哲学の「気」の概念を背景持つことを検証した。また、画論を通して「虚実対比」について分析を行った。

西漢時代の思想書『淮南子』には、万物は陽の気と陰の気の集合バランスによって生まれたという天地創造説話が記され、気は万物を生む生命エネルギーであり、万物共通の構成要素と認識されている。謝赫（南齊・梁）の『古画品録』は中国最古の画論とされている。その中で「六法」という絵画における鑑賞の指標となる六つの規範があり、その一番目に「気韻生動」と挙げられている。この時代は人物画が主流だったゆえに、目に見える形、色、用筆などより、対象(人)の生命力や精神が表されることが最も重視されていた。そしてこの「気韻生動」の要である「気」の概念は、中国伝統哲学において、様々な理論の根源となっている。

儒教の経典『易経』は万物を二元論で分析して、対立する「陰」と「陽」に分けるが、それらは変化し合い、常に運動している状態にあるとされている。また、『老子道德経』は、言葉では形容できない宇宙共通の法則を「道」と名付ける。道から数段階の派生を経て万物は形成されるが、陰陽の気は混じり変転しあい調和をなしている。そして自然を観察することによって「道」に近づくことができると述べている。『莊子』は自然と共に生きながら精神的自由を得ることを提唱し、隠逸思想の流行を招いて山水画、山水詩の元となった。

「気」は元来、大気中に充満して流動するものとして、「雲」や「霧」を語源とする。人物画に代わって山水画が主流になると、雲、霧、さらに空、水など固定的な形のないものは余白により表現された。華琳(清代)の『南宗秘訣』は「空も水も煙も道も日の光も皆空白で作る」と述べている。更に山や地面(実体)も、一部を余白で途切らせることや、ぼかしで境界線を曖昧にすることもある。空、水などを表す余白部分(虚)は見る人の精神に働きかけて想像力を掻き立たせる。形のないもの(余白)で形のないもの(精神力)に影響を与えるという考え方は、「気」の概念とも結びつく。余白部分は想像に任せるがゆえに無限であり、宗白華は『美学散步』(1981年)において「中国絵画において最も重要な部分は余白にあり、その余白は真に存在するものではなく、靈氣が往来する所であり、命が宿る所である」と述べている。

また、余白(虚)と主体(実)の対比だけでなく、その間にある相対的な細かな対比は更なる虚実関係をもたらす。この対比対象によって転換していく関係を笥重光(清代

1623-1692年)は『画筌』において「虚実相生」と呼んでいる。本論文では「虚実相生」理論を踏まえた上で、「虚実対比」を「気」の概念における陰陽の変転に基づく概念として扱う。「虚実対比」という見方は画面全体の対比だけでなく、細部における墨の濃淡対比によって生まれる対比関係の転換のことも指すものとする。

第三章 伝統絵画における「虚実対比」

第三章では、中国絵画史上、余白を大きく表現した南宋画、そしてその影響を受けた日本近世の狩野派、長谷川等伯、琳派の作品を「虚実対比」の観点から分析を行う。

中国南宋画は余白を増やし、途切れる構図と中小景を描くことで中国絵画を一変させたとされている。南宋宮廷画家として活躍した馬遠と夏珪は禅画と民間の文人画を参考して、対象を縁で途切らせて余白を大きく取る「馬一角」「夏一辺」と呼ばれる構図を生み出した。小さな景色を余白とともに湿潤な雰囲気表現した画風は、中国江南地域と気候風土に近い日本で大いに好まれるところとなった。

「六法」は南宋禅画と宮廷山水画と共に日本に伝来して、「気韻」は日本の画論にも「気運」、「神」と読み替えられながら、近世の日本絵画でも重要視された。日本の中世から近世にかけて最も勢力を誇った狩野派は、中国南宋画の画風を引き継ぐとともに、金箔地を余白として、絢爛な彩色で彩る金碧障壁画を創始した。「余白」は、中国では「留白」「空白」などと呼ばれているが、狩野探幽はそれをさらに発展させて余白を大胆に用いた「軽み」と称される新しい画風を創り出した。長谷川等伯、さらに尾形光琳に代表される琳派の作品のいずれもが、景物と形のない余白の両方、更にそれぞれのうちにも緻密な変化と変転が見出すことができ、「虚実対比」の多様性を示す視覚的に細かな対比関係を含んでいるといえる。

第四章 格子の考察

第四章では、建具である格子を空間における「虚実対比」をイメージさせるものとして考え、格子の歴史、特徴などについて考証するとともに、動画実験、実地調査、文献調査の結果を考察した。

本論では、格子が注目の仕方(格子単体の場合格子が実で隙間が虚だが、後ろの透けた景色を覗く場合、背景が実になって、格子が虚になる)や角度(正面は透けて後ろの景色が実で格子が虚だが、斜めから見て透けなくなった場合、焦点は格子に戻って格子が実になる)によって虚実関係が転換することによって「虚実対比」を含んでいると考える。建具格子

は元来、光と風を室内に入れるために作られていたが、更に防犯とプライバシー保護のために現在の形になったと考えられる。しかし展示会では住宅などとは内と外の明暗関係が反転して、中が覗けやすくなり、興味を惹く視覚効果となり得ると考える。

日本の「連子窓」は中国の「櫺子（リンシ）窓」が伝来した際に音訳したものと思われる。中国最古の木造建築の文献『営造法式』（宋代）には「破櫺（ポリン）窓」、「睽電（ダンデン）窓」、「版櫺（バンリン）窓」の三つ窓の作り方についての記述がある。その中で「版櫺窓」は断面が長方形の角材を使用した建具であり、三者の中では現在の格子に最も近い形をしている。柱間1丈（10寸）につき太さ2寸、奥行7分の角材を1寸の隙間に配置して21本とすると規定され、柱間が1寸増えるごとに断面寸法は変えずに、角材を2本増やすと記述されている。しかし、この隙間が狭い寸法は内側を隠すためのものと考えられ、見せることを目的とする展示会には適合しない。また、日本の伝統建築の寸法を定める木割り書「匠明」にも格子についての明記はなく、故に筆者が独自に検討した寸法の格子を展示会ブースに応用することを考えた。

第五章 展示会のブースデザインにおける「格子」

第五章では、用途と目的に応じて、異なる寸法の格子を用いた展示会ブースのデザインを紹介した。展示会ブースは目立つだけではなく、興味を惹いて入りたいと思わせることが集客に繋がると考える。格子によって視覚的情報は「省略」され、見る人はそれにより、かえって「分かりやすさ」が加わると共に、不明な部分に興味をいだき能動的に見ようとする。つまり、見る人の内面に働きかける想像する力が、「省略」によって引き出されると考える。

本論文では日本で行う展示会を想定して、展示会の名前、対象会社の名称、ロゴ、商品、テーマなどを設定した上で、格子を応用した展示会ブースのデザイン例を5点示した。格子の寸法はそれぞれ動画実験の寸法、実地調査で興味を惹くと感じられた格子の寸法、または展示内容に合わせて変化させた寸法と色を試みた。それにより、派手さより、省略によって情報量を制限し、分かりやすさを重視したブースの方が、見る人の想像力を喚起して興味を惹くことができることを提唱した。

第六章 結論

第六章では結論と今後への展望を述べた。日本では特に「余白」が重要視されるが、中国においては余白と実体双方の関係性が着目された。本論文は、その関係性の概念である

「虚実対比」の背景を考察し、格子を「虚実対比」の特徴を含んだ空間エレメントとして、展示会ブースに応用する表現の試みを行った。そしてそれぞれ展示内容に合わせて、異なる寸法と色の格子も使用した。

今後の課題としては、コロナ禍の影響で中止となった実証実験を通して、格子の寸法の違いによる観客の興味の変化を明らかにしたいと考えている。また、格子による展示会ブースの集客力を実証することや、異なる材料と色の格子の活用もこれからの検討課題である。

審査の結果の要旨

論文審査までの過程

徐夢妍氏は、2016年6月南京工業大学アート&デザイン大学院修士課程建築学専攻を修了し、その後来日して2018年4月女子美術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程に入学した。

女子美術大学大学院在籍中は、展示会ブースデザインの研究を進め、2019年に「中国における商業展示会ブースのデザインと機能に関する研究」と題する論文を女子美術大学研究紀要に投稿し掲載された。また来日前には、展示会デザインを専門とする会社のデザイナーとして研修した経歴をもち、南京工業大学大学院在学中には単著で「浮世絵版画の日本現代グラフィックデザインにおける影響について（原文：中国語）」と題する論文、共著で「五感感受型の展示空間のデザインについて（原文：中国語）」と題する論文をそれぞれ中国の専門誌において発表した業績がある。

審査は、2020年11月14日に研究作品審査会を行い査読付き論文と合わせて徐氏に学位申請資格があることを確認したうえで、2020年12月3日に予備申請された論文に対して、標記審査員全員が、構成・論理的記述法などについて、幾つかの指摘を行なった。それを受けて徐氏が論文内容の組み替え、加除、訂正を行ない、2021年2月12日に提出された本論文をもとに、2021年2月25日午後3時から、オンラインにより標記3名の審査委員による最終審査が行なわれた。なお当日の徐氏の論文発表には、学外の研究者等にも参加を呼びかけ公聴会を兼ねた。

論文審査の結果

徐氏は博士学位請求論文「「虚実対比」を生かした商業展示会のブースデザイン—格子を視点として—」の序論において、「筆者は中国で展示会ブースデザイナーとして実習をした際に、インパクト優先のブースが連なる展示会現場を煩わしく感じた。「分かりやすさ」より「見栄えのよさ」という主流の考え方は、人を惹きつける魅力に欠けると考えられる。そして

その原因は、一目で見える情報量の過多と考える。本論では、情報を削除するのではなく、「省略」表現としての日本の「余白の美」に着目して、その源流である中国伝統絵画にある「実体」と「余白」両方を重視する「虚実対比」の概念についての検討を試みた。そして山水画における「虚実対比」を伝統的絵画理論と中国伝統哲学から探ることで、展示会のブースに適用する手段として、格子型仕切りに関する考察を行った。」と述べている。徐氏は、その探求を行うために文献調査や京都・奈良に所在する寺院建築や町屋における格子窓の実地調査、格子型間仕切りの3D動画による印象評価実験、それらの分析と考察の結果得られた知見を展示会ブースデザインに応用すること等により、来訪者にブース内の展示に興味を抱かせるデザイン手法の提案を行っている。

論文は、次の6章で構成されている。

第1章においては、本研究に関わる研究背景を概観し、研究目的および論文構成が示されている。

第2章においては、「余白」と「虚実対比」の概念が生まれる要因について、日中絵画における「気韻生動」の法則が中国古典哲学の「気」の概念を背景に持つことを検証している。また、画論を通して「虚実対比」についての分析を行っている。

第3章においては、中国絵画史上、余白を大きく表現した南宋画、そしてその影響を受けた日本近世の狩野派、長谷川等伯、琳派の作品を「虚実対比」の観点から分析を行っている。

第4章においては、建具である格子を空間において「虚実対比」の関係をイメージさせるものとして、格子の歴史、特徴などについて考証するとともに、動画実験、実地調査、文献調査を行っている。

第5章においては、展示会ブースは目立つだけではなく、興味を惹いて入りたいと思わせることが集客に繋がるという考え方の下で、用途と目的に応じて異なる寸法の格子を用いた五つの展示会ブースデザインを紹介している。

第6章においては、結論と今後の展望が述べられている。本論文は、関係性の概念である「虚実対比」の背景を考察し、格子を「虚実対比」の特徴を含んだ空間エレメントみなして、展示会ブースに応用する表現の試みを行ったが、実証実験を通して、格子の寸法の違いによる観客の興味の変化を明らかにすること等が今後の検討課題として挙げられている。

以上本論文は、日中の画論や中国古典哲学などを通して広範囲に「虚実対比」の概念を探り、その知見を応用することで、目立つだけではなく人の興味を惹いて入りたいと思わせることが出来るブースデザインの手法を明らかにしている。これらの成果は、今後の商業展示会におけるデザインのあり方を考えるうえでも重要な意義がある。また本論文は、日中の伝統思想や美意識を背景にデザインの一つの発想法を例示するもので、商業展示会をテーマとする学術論文は世界的にみても稀有な成果として評価できる。以上をもって徐夢妍氏の学位請求は、審査委員全員の合意をもって合格と判定された。

以上